伊波（いは）（イファ）

伊波の今昔

伊波は、伊波グスクの南西麓に集落が広がる。標高約80ｍのカルスト台地に位置する伊波グスクから北東の眺望は絶景である。昭和57年に第一印刷から発行された『沖縄百景』に金武湾洋上をはじめ、石川岳や恩納岳、石川市街の風景が掲載されている。このグスクの東側下方の傾斜地に国指定文化財の伊波貝塚がある。

王国時代には、西宿の仲泊と東宿の東恩納とを結ぶ交通の要地にあった。明治35年の新聞に「伊波村には中頭郡でも屈指の小間物店があり、美里間切・恩納間切・金武間切におよんで商品を供給していた商店がある」との記述がある。明治27年には、小学校が設立され、周辺地域の中心をなしていた。

伊波メンサーは、古い時代から伊波にのみ伝わる織物でその紋様の出し方や織り方に特徴があるといわれ、その技能や織り具は市指定文化財となっている。

伊波村には、伊波の金細工（加那）と呼ばれる人がいた。金細工道具を担いで村々里々を回って農具や日用品を修繕する仕事である。「加那は、美男子で性格は底抜けに明るく、ひょうきん者であったからテーファ加那といわれて常に人から好かれていた（石川市史）」。その加那阿兄のことが「金細工節」として謡われ、軽快な踊りは県民に人気がある。

現在、伊波東方の傾斜地や南方周辺は住宅地として拡大し、また西側には美里・石川方面を結ぶバイパスが開通し、自然環境や生活環境が大きく変化しつつある。

市指定文化財　伊波メンサー織

伊波地名を再考する

伊波の表記について『石川市史』は、「慶長検地長（１６１０年）に伊覇、元文帳（１７３６年）には伊波となり、以後伊波と表記されるようになった。」と記述している。伊波は、王国時代は越来間切伊覇村、次に美里間切伊波村となり、その後、美里村字伊波となった。終戦後は、石川市伊波となり、そして現在は、平成17年４月の２市２町の合併により、うるま市石川伊波となって行政所管の変遷は激しい。

伊波の地名について『石川市史』は、「伊波という地名、すなわちイハ（伊波）には海浜の意味があって地相によって付けられた地名であるという。しからば何故イハが海浜の義であるかについては、イーフが転訛してイハになったと言われている」と述べているが、（イーフは、大雨や川の流水などによって運ばれてきた土砂や海砂が堆積してできた土地のこと）イハ地名の語源については、次のようなことが考えられる。

① 伊波は、標高約80ｍの台地上に位置する。このことから語源は上方・上端（イーファ）で意味は台地にあるところという意味。

② イハのハが山入端のような「端」をいうのであれば越来方面から北西の端という意味で亥端（イファ）に解され、あるいは、亥方（イファ）がその語源で意味は越来から北西の方向という意味か。

以上、伊波の地名についてはいろいろな視点から考えられるが今後の研究課題である。

古我地原とイナガミムイ・ナガマーチョー

沖縄自動車道を沖縄北インターから北に嘉手苅方面を過ぎた高架道の下方一帯に縄文時代中期のものといわれる古我地原貝塚がある。古我地のコガ・クガは、植物のサルナシの木のことでこの一帯の植生からクガの生えている地として呼ばれたと思われる。

沖縄市池原方面から国道３２９号のバイパスを伊波向けに行くと左手のゴルフ練習場を過ぎ、やがて西に山城、右手の方に細長い丘陵が道路に沿うように約１㎞続き、丘の北西側の斜面に伊波按司の墓がある。この丘を伊波ではナガマーチョー、山城ではイナガミムイと呼んでいる。

かつては丘に沿って長い松林が続いていたのでナガマーチョーと呼ばれた。イナガミのイナは、畝（うね）から転訛したもので畝状になっているところを指し、ガミは高いところを指す頭の意味で「畝のように高いところ（ムイ）」という意味に解される。